

【最優秀賞】（旭川地方法務局長・旭川人権擁護委員連合会長賞）

タイトル：偏見を捨てて

生徒氏名：岩村洋海

みなさんは知的障害者をどのように見えていますか。

僕は小学六年生のとき、職業体験で鬼鹿更生園に行き仕事を体験しました。更生園は十五歳以上の知的障害の人たちが生活し、障害の軽減と自立的生活を目的としている施設です。

職業体験では更生園の園生のみなさんと一緒に施設内の掃除をしました。始める前は更生園の中は広いからたくさん掃除をしないとイケなくて大変だと思っていましたが、園生のみなさんがどんどん掃除をしていくのでやっていないところを見つけることの方が大変でした。

知的障害者には症状の軽い人から重たい人までいろいろいます。中には言葉を話せない人もたくさんいます。ですがみなさんと同じように生活し、同じように過ごしているのです。

ぼくの両親はどちらも福祉に関係する仕事をしています。

これは母から聞いた話なのですが、

「昔、知的障害者の人達と散歩をしていたら知的障害者めがけて石を投げて逃げていった小学生がいたんだよ。」

と言っていました。ぼくは思わず聞き返してしまうほどおどろきました。他にも、知的障害者のそばにいとこの症状がうつると言っている人もいたそうです。

みなさんは知的障害者を怖いと思ったことはありますか。かわいそうだと思うことはありますか。

たしかに知的障害者は少し自分たちと違って怖いと感じる人もいます。ぼくは親がどちらともそういう仕事に就いていますし、また何回か接していたので怖いということはまったくありませんが、初めて会ったときやあまり彼らのことを理解していなかったら、ぼくも怖かったと思います。ぼくには怖いという気持ちはなかったのですが違う気持ちがずっとありました。それは、知的障害者の方々は自分の考えや思ったことを言葉で表現することができなかったり、ぼくたちにとっての当たり前の生活ができなかったりしてかわいそうという気持ちでした。でも両親や更生園の職員の話や話をきいたり、実際に職業体験で園生のみなさんと掃除をしたりしてみてもその考えが間違っていることに気づきました。一方的にかわいそうだと思う込み、彼らのことをそういう目線で見るとするのはひどいということがよくわかりました。

ぼくの親も含めて、知的障害者の方々と接している人たちが大事にしている言

葉があるそうです。それは、「共生共育」という言葉です。つまり知的障害者の方々と共に生きていき、自分たちと知的障害者の両方が共に育っていきこうということです。この言葉はそういう仕事をしている人だけでなくぼくたちも大事にすべき言葉だと思います。しかし、そのためにはまず知的障害者の人たちを受け入れることが必要です。怖いと思いながら話をしたり、かわいそうだと思いながら接したりするのは、本当に受け入れたことにはならないとぼくは思います。ぼくたちが友達と話したり、近所の方と話したりするような普通の話し方、付き合い方が本当に受け入れているということではないでしょうか。

ぼくたちは知的障害者から学ぶことがたくさんあると思います。例えば、普段の生活でめんどくさいとさぼってしまうことがあると思います。でも知的障害者の方々は自分の仕事をもくもくと進め、さぼらず真剣に行っていました。他にもあります。ぼくは学校に行くときなどによく会いますがいつも誰にでも自分からあいさつをしてくれます。当たり前のことをきちんとやっています。ぼくもそれを見習って進んであいさつしようと思うようになりました。

最近、更生園の利用者の方々が地域に出て生活するようになっています。だからこそ受け入れて、ときには学び共に生活することが必要になります。

知的障害者への偏見をすて平等に接する。相手の良いところは見習い、相手に教えられることは教え共に育ちながら生きていく。これが良い地域づくりの第一歩にもつながるとぼくは思います。

運動会のときや町の行事のときなど知的障害者に会う機会はたくさんあります。

みなさんは知的障害者をどのように見えていますか。他の人と違うように接してはいませんか。もしそういう人がいれば、友達や近所の人と同じように接してみてもいいでしょうか。